

津本陽

tsunomoto yo



社文庫
講談
三

げてん ゆめ
下天は夢か ㊦

つもと よう
津本 陽

© Yo Tsumoto 1992



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

1992年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3509

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容
についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。

(庫)

ISBN4-06-185060-1



講談社文庫

下天は夢か

(三)

津本 陽

講談社

目次

狂瀾きょうらん

叡山焼討

三方ヶ原みかたはら

幕府滅亡

疾風枯葉

極楽幻想

7

88

152

264

306

358

本文イラスト・深井国

下天は夢か
(三)

狂きよう瀾らん

姉川合戦ののち、木下勢二千三百余人は江州浅井郡横山城在番として、北国街道最前線の要害をかためていた。

江州の備えはほかに、坂田郡佐保山に丹羽長秀三千六百余人、大津宇佐山城に森よしな可成なり千三百余人、坂本城に肥田玄蕃八百余人が在番となっている。

藤吉郎は、美濃へ帰国の途中に立ち寄った信長に命じられ、七月なかばから京都に出て、京都奉行役村井貞勝の補佐をつとめていた。

藤吉郎に随行した前野将右衛門以下六百の人数は、皇居警衛の任につく。

藤吉郎の摂家、清華せいがなど公家衆のあいだでの評判は上々であった。学問もない武者ではあるが、時宜に應じての丁寧な応対をして、地侍に横領された領地年貢などの悩みごとを聞かされると、さっそく手配りして適切な措置をする。



ことが成就すると否とにかかわらず、相手が納得するだけのはたらきをみせ、明智光秀と肩をならべる重職についているのに、お小人の昔とかわらない腰の低さで人気をあつめた。

神社、仏閣、諸堂の所領安堵、諸公事（税金）においても不公平にならないよう、こまかく気をつかう。

横山城の留守をあずかる小六は、いつ合戦がはじまっても、大軍の兵糧、秣に窮しないよう、近隣諸村からの調達をいそいでいた。

城内に十棟の米蔵を新設して、すでに兵糧米千八百石をあつめている。

城内望楼から物見の兵が四方を見張り、坂田郡、犬上郡の山谷に一揆蜂起の煙があがれば、常時合戦支度をととのえ、控えている軍兵が繰り出してゆく。

手向う一揆百姓は斬り伏せ、迫いはらい、

村落はすべて灰燼かいじんとして、反撃の機運を与えない。

浅井、朝倉の動靜探索には、小六の一族蜂須賀小十郎かしらが頭となり、十町素走才二郎など、ふたつ名前の手利きの細作たちが動いている。

北国街道本の本宿から、若狭、越前境のあたりまで、針売り、傀儡くぐつつかいなど七道の者に化けて入りこんでいるので、敵の内状はすべてつかんでいた。

「これで御大将の色好みがほどほどなれば、万事手落ちはないのだがや」

小六は竹中半兵衛に、苦笑いをみせた。

藤吉郎は人なみはずれて腎氣じんきつよく、京都で眉目みめよい女に出会えばたちまちあとを追ひ、妻のおねとのいさかいが絶えなかった。

小六の傍にいた川並衆の頭衆加藤作内が、いいだした。

「うちの御大將は、器量よしならば娘、年増の区別もなく、だばはぜがごとく、食いつきなさりやーすがのん。信長旦那は子持ちの後家ばかりお好みなさるのだがや」

小六が聞く。

「おふう殿のことかや」

「それだでや、信長旦那は岐阜におらるるあいだは、お居館いやかたのおふう殿の座敷ばかりにござらつせると、お城の女中衆が嫉いておるだなん」

作内は三日まえまで、岐阜城にいた。

「おふう殿は器量がとびぬけてええが、頭つむりもええ女子おなごでや。信長旦那は頭のわるいひめは、ご寵

愛せんぎゃあ」

「かと申して、二人の子持ちの後家をばかわいがらずとも、ええ女子を撰りどりならるるご身分でさ。お胸のうちがわからぬでさ」

作内が腕を組むと、小六と半兵衛が顔をみあわせ、笑みをもらす。

作内が思いだしたように、せきこんで告げる。

「それにのん、おふう殿の名前を、なべとつけられたでや」

「ほう、それならご寵愛はこののち長かろうであーな」

小六たちはうなずきあう。

信長には愛する女性の名として、台所でつかう器具や食物の名称をつける癖があった。

永禄十年（一五六七）五月、家康の嫡男信康に嫁がせた長女徳姫は、幼時には五徳（火鉢にもちいる三脚）と呼ばれていた。

信長がおふうという側室に鍋と命名したのは、よほど愛しているためであろうと、小六は思った。

他の側室たちには、杓子、重箱、ひしお、たこなど、さまざまな名前がつけられている。

おなべの方と名づけられ、信長の寵愛をうけている女性は、近江野洲郡北里村の土豪、高畑源十郎の四女であった。

彼女は近江八尾山城主、小倉右京実澄に嫁し、男児二人をもうけたが、八尾山城は日野城主蒲生定秀に攻められて陥落、右京は自害したため、実家にもどった。

信長の側室となったのは、元龜元年三月のころで、織田家侍大将奥政景の仲介によるものであった。年齢は二十一歳である。

おなべの方の、亡き生駒御前吉野に似た、色白の艶冶な容姿は、岐阜城の上藤たちのなかでも際立っていた。

作内は、小六に問いかける。

「信長旦那は、なんでおふう殿におなべなどと、異な名前をつけられるのかや」

小六が口もとをほころばせた。

「それは童の時分に、おふくろさまに嫌われしゆえに、ちがいないのだで。旦那は嬰兒のとき、あまたの乳母の乳首を噛みやぶったあげく、大乳の方の乳だけをお吸いなされしと聞くがのん。いまだに大乳の方をば、実の母御がようにうやまい慕うておらつせるでや。乳は嬰兒の食いだでなん。気にいられし女子に台所道具、御器などの名をつけらるるは、食いものに縁あるゆえだでや」

「ほう、さようなものかのん」

作内は、まだ納得できない顔つきであったが、竹中半兵衛はうなずいた。

「小六どのが推量は、まことに的にあたつてござるだで」

小六は川並衆の頭領として、忍びの達者であるだけに、ひとを觀察する眼がするどかった。

信長は自分に刃向い、侵そうとする敵に対しては、異常なまでの攻撃本能をあらわし、心中に破滅への願望がひそんでいるのかと思えるほど、危険に身を挺するのをためらわない。

彼の側室は数多かったが、これまでに愛情をかたむけた女性は、生駒御前の吉野ただひとりであつたと、小六は見ている。

信長には、自分と性格のあう女性を見分ける、鋭敏な感覚がそなわっていて、内心の希求をみたすにたる相手をみつけると、おのれのすべての弱点をさらけだし、もたれかかってゆくのである。信長をうけとめる女は、ゆたかな母性の持ち主でなくてはならなかった。

八方に敵をひかえるうえに、味方のうちに義昭のような危険きわまりない対抗者を置いている、信長の日常は、緊張をゆるめる暇もないものであつた。

信長は危機をのりこえ、敵を打倒する術策において、利刃の切れ味をみせる。

敵に対してはみじんも容赦せず、現世からすべて抹殺してはばからない。

義昭は摂津の戦場で首実検をしたとき、いくつかの首級を見ただけで悪心をもよおして座を立ち、その後しばらく怨霊の幻影になやまされた。

信長は腐臭たよう首級数千を実検したのちも、平然と飲食ができた。彼にとって、敵の屍体は物にすぎない。

だが、彼の心は乾燥し、ひびわれ痛んでいた。

北近江の野山に二日つづきの大雨が降ったあと、いちだんと涼気の増した八月十五日の昼まえ、とんぼの群れ飛ぶ湖畔の道を、南から疾駆してきた騎馬武者の一団が、横山城大手門に到着した。

先頭に立っていた侍大將は、藤吉郎の義兄林孫兵衛（木下家定）であった。

孫兵衛は京都から、藤吉郎の書状をたずさえ、急行してきたのである。

城の留守居役木下小一郎（秀長）、小六、竹中半兵衛らが集まり、書状をひらく。

「三好三党衆、諸牢人あわせ宗徒一揆の輩糾合、およそその数一万数千あり、摂州の山野凶徒充満、なお日を追ってその人数を相増し、畿内中筋をうかがい洛中に乱入を相くわだつるの刻、右の趣岐阜に注進あるべく候。

八月十四日

藤吉郎花押

小一郎どのへ

人々へ

小六たちは相談のうえ、ただちに稲田大八郎を使者にたて、岐阜表へ急を知らせた。

「いざ合戦でや。浅井、朝倉めらが、三好としめしあわせ、またぞろ出て参るやも知れぬぎやあ。いつ攻めらるもうろたえぬよう、支度いたせ」

横山の城兵は持ち場をかため、夜になれば篝火を炎々と燃やし、警戒を厳しくした。

十八日の朝、藤吉郎が将右衛門と六百の軍兵を率い、帰城した。

「小谷の動静、朝倉が身統ぎ（加勢）の人数がいできたるをば見おとさば、おおごととなるでや。小六、細作の人数を二層倍にもせねばなるまい」

藤吉郎の命令によって、細作の群れが北国街道を越前に向った。

「御大將、三好の奴輩は本陣を摂州中島の野田、福島（大阪市都島区、福島区）に置いたという

が、そこはいかなるところでや」

小六が藤吉郎に聞く。

「地理にくわしきあやつどもがたてこもるだけに、容易ならぬ要害だわ。西は大海にて四国、淡路への船の通り路でのん。東は川幅二百間を超す近江川でや。城のまわりは一面の沼田ゆえ、まことに攻めがたく守りやすき所だわ。そこに陣取り信長旦那をひき寄せ、一戦に及ぶべしとの段取りにあらあず」

「野田、福島を攻めたるのちは、石山攻めか」

「さように事のはこぶなら、苦はねあーが。お殿さまには本願寺の法主はつすに、近頃石山本山を破却すべしとのお指図をなされたでや」

「そうなりや、一向坊主どももかなわぬまでも手向いたすであらうがや」

二人は口ごもり、眼を見交した。

八月二十一日の昼まえ、岐阜城から使い番の母衣武者はちろう一騎が、横山城に到着した。

「お殿さまには今朝寅の七つ刻（午前四時）、美濃、尾張、伊勢、三河、遠江の衆、都合三万人を引具ひきぐあすばされ、岐阜城大手をご出陣なされてござりまする。諸軍陣所、兵糧お支度を、早速になされて下されませ」

藤吉郎は注進をうけるなり、三万の軍勢を迎える用意にとりかかる。

小六は曇り空を眺め、広大な曲輪くわだうちにかねて用意した材木を大工衆に運ばせ、仮小屋を立てつらねさせた。

「雨さえ凌げりや、ええのだわ。一日、二日で取りかたづけるのだで」

小屋組みのうえに板屋根をとりつけるだけの掘立て小屋の群れは城内を埋め、翌朝までにできあがった。

「お殿さまはお気早うござるだで、お着きははやからあず」

藤吉郎たちが矢倉に上がり、岐阜の方角を眺めるうち、昼すぎになつて遠雷のような物音が、かすかに野のはてから伝わってきた。

前日とはかわつて晴れわたつた空の下、冴えた陽射しのみなげる遠景に、やがて人馬のどよめきとともに、くろぐろと密集した軍勢の行列があらわれ、こちらに向つてくる。

列中には甲冑のきらめきが、銀砂子をちりばめたように見え、砂埃が雲のようにたなびいていた。

「それ、お迎えいたさねばならぬでや」

藤吉郎が梯子段を踏み鳴らして矢倉を下り、小一郎、林孫兵衛らがあとにつづいた。

信長は未の八つ刻（午後二時）に横山城に着陣した。あいかわらず明衣に陣羽織のバサラないでたちの彼は、本丸大広間で藤吉郎から、三好三人衆のひきおこした畿内騒乱の様子を、くわしく聞いた。

「三好がやからは、先月二十七日に摂州中島天浦の森に陣を置き、野田、福島に要害を設けたるうえ、近江川の浅場には乱杭、逆茂木、大綱を引きまわし、たてこもり、その勢ははじめとかわらず一万三千にござりまする。二十九日には淡路の安宅甚太郎一味のやから千五百余人が、兵庫